〈青森県史〉の窓 90

招魂祭でつながる地域

蔦谷大輔
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

1868（明治元）年から翌69年にかけて勃発した戊辰戦争では、弘前藩は藩領内での戦闘はなかったものの、秋田・野辺地・箱館や庄内地方などに軍勢を送り、合計67名の戦死者を出した。戦後、招魂祭の挙行や招魂社造営が諸藩で進められる中、弘前藩では弘前宇和野（現弘前市小沢・大開周辺）で招魂祭を実施し、その付近の大星場（大砲訓練所）に招魂堂を造営した。さらに、青森原別野（現青森市原別にあった原野か）に招魂本社を造営する計画も立てられていた。その一方で、秋田・箱館においても藩は戦死者を出していたことから、同地で行われた招魂事業へも積極的に参画したって、明治政府や各藩では、慰霊のための石塔や墓碑の建立にとりかかり、弘前藩もこれに加わって人夫ら20人を派遣した。また、すでに戦死した地に埋葬されていた藩兵の遺体も、このとき箱館に改葬されたようである。

なお、大森浜での招魂祭や、招魂場造営直後の招魂祭の規模については、よくわからない。『函館市史　通説編第2巻』によると、明治10年代の招魂祭では、消防組の梯子乗りや手踊り、競馬、帆前船の競争などの催し物が大々的に行われ、大勢の参拝客により盛況だったという。弘前藩（青森県）の招魂祭においても、71（明治4）年以降競馬の催しが行われており、徐々に騎馬＝軍事力のアピールという側面が強まっていた様子がうかがわれる。

一方、69年8月には、秋田で招魂祭を挙行するという案内が弘前藩に届き、藩士岩田平吉らを派遣して参列させた。また、これと並行して墓碑の建立も進められ、秋田や矢島（現由利本荘市）に仮埋葬されていた遺体は、全良寺（現秋田市八橋）内の官修墓地に改葬された。墓碑は同年11月に完成し、墓碑の開眼供養が行われたほか、招魂社（現秋田県護国神社）で祭事が営まれた。墓碑の管理・修繕や回向は、全良寺の住僧が自費で行っていたようで、71年3月、弘前藩は金30両を同寺に寄付した。

このように、弘前藩の戦死者67名のうち、秋田・庄内戦争での死者13名、箱館戦争での死者25名は、秋田・箱館において手厚く慰霊あるいは供養された。祭事の折には藩の役人を派遣し、石塔や墓碑の管理は現地の招魂社や寺院に依頼し、藩から寄付金や供物料などを支給していたことから、弘前藩は少なからずこれらの地域と結びついていたのである。

函館護国神社社殿
（2012年6月17日　蔦谷大輔撮影）